

教育研究業績書						
日付　2025年2月28日						
氏名　三光寺　由実子						
研究分野			研究内容のキーワード			
財務会計および会計史			会計史、会計学、日本、中世、仏教			
授業・教育向け業績						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	PRJ該当	招待論文該当	概要
「数とそろばん」『西洋中世文化事典』	共著	2024年6月	丸善出版			7世紀から11世紀にかけ、ヨーロッパに伝来されたアラビア数字が、ヨーロッパにおいてローマ数字に与えた影響と、注番の変革、さらには会計帳簿の記帳の変遷について説明。
学術理論的研究業績						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	PRJ該当	招待論文該当	概要
【研究会　報告】 Accounting History and Buddhism in Medieval Japan:Chronological analysis of accounting materials by Kōmyō-kō-kata (1398-1432)in Toji Temple	単独	2022年8月	神戸大学会計史研究会			中世寺院会計史研究の分析視覚と方法を考究するために、東寺　光明講方算用状ならびに、その関連文書を用いた検討内容を整理。日本国内における中世会計史研究の希少性、そして海外における宗教会計史研究の関心の高まりを示すとともに、今後、会計史研究が学際的研究領域の一つとしてなりうる可能性を提示。
【学術会議　報告】 Accounting History and Buddhism in Medieval Japan: Chronological analysis of accounting materials by Kōmyō-kō-kata in Toji Temple	単独	2022年9月	Center for Japanese Studies, UC Berkeley			東寺　光明講方算用状研究の研究可能性として経済史・会計史・仏教史的という三つの視点から学際的な研究領域を開拓しうることを講述。これまでの研究成果を踏まえ、今後、特に三つの視点を融合した研究を遂行することを視座。
「賀茂別雷神社文書　延徳年間における土田庄公用銭算用状研究にむけて―未翻刻史料の紹介―」	単著	2022年9月	和歌山大学経済学会研究年報，第26号。			土田庄公用銭算用状のうち、延徳年間における未翻刻史料を紹介。その研究意義について、とくに会計史の観点から説明。さらに「史料紹介」において3点の史料の翻刻を提示。今後の会計史研究を発展させるための基礎的研究としての可能性を提示した。（pp. 345-356）
【研究会　報告】 数とそろばん	単独	2022年12月	神戸大学会計史研究会			中世ヨーロッパ史の一環として、アラビア数字からローマ数字への変更、その中で西洋そろばんがいかに誕生し、普及に行ったのかについて言及。さらには数字と関連性の深い、イタリアの複式簿記の誕生についても概説。
【研究会　報告】 数とそろばん	単独	2023年1月	神戸大学会計史研究会			上記「数とそろばん」について改稿し、さらなる知見を加えて報告。特に、複式簿記の記述について、より「数字」との関連性を詳細に、さらに、会計帳簿の実例の解説を増加して説明。中世ヨーロッパにおける数とそろばん―ローマ数字からアラビア数字へ、西洋そろばんから筆算へ―といった変革は、商用算術にも影響を与えたことを明示。
「中世東寺の寺内算用状における研究史―会計史的視座の構築を見据えて―」SBI大学院大学紀要第12号	単著	2025年1月	SBI大学院大学			中世寺院会計史研究の構築を念頭に、鎌倉・室町時代を中心に、教王護国寺（東寺）の寺内算用状を扱う先駆的研究を鳥瞰的に概観。
実務的業績						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	PRJ該当	招待論文該当	概要
連載第1回　会計史という世界を歩く―なぜ「会計史」を研究するのか―	単著	2021年5月	きしわだ所報、岸和田商工会議所		○	「会計史」という学問領域について、一般的に概説。会計史の定義、会計と複式簿記の関係、会計史研究の目的について述べ、会計史研究が過去に目を向ける中で、現在・未来を見据えるという壮大な研究であることを言及した。それに留まらず、古い古文書から先人たちの思考を読み解く魅力を強調。（p. 13）
連載第2回　会計史という世界を歩く―テンブル騎士団の会計史―	単著	2021年6月	きしわだ所報、岸和田商工会議所		○	テンブル騎士団の会計史について、残存史料から得た知見を概説。とくに、会計史研究の一つのテーマである、複式簿記生成史との関係性を明示した。すなわち、分析の結果、テンブル騎士団の会計帳簿は、複式簿記で記載されていなかったことが明らかになったが、顧客・業務別管理を、会計帳簿を分けることで徹底し、複雑な金融業務を巧みに振り分けていたことを説明した。（p. 19）
連載第3回　会計史という世界を歩く―フランス・リヨンの毛織物業者の会計帳簿（1320-1324）の研究―	単著	2021年7月	きしわだ所報、岸和田商工会議所		○	リヨンの毛織物業者の会計帳簿（1320-1324）について、ローヌ県の古文書館が保管する、計2枚の会計帳簿の断片および、ヴィエンヌ図書館が保管する、7枚の断片の史料についての分析結果を明示。複式簿記での記入はされていないものの、債権記録について、会計学でいう「人名勘定」の生成がみられるのではないかという見解を述べた。（p. 19）

連載第4回 会計史という世界を歩く―日本中世会計史への転換期―	単著	2021年8月	きしわだ所報、岸和田商工会議所		○	日本中世会計史研究を行う必要性、目的・意義について言及。とくに、会計史研究において江戸時代以降の研究蓄積に比較し、圧倒的に量が不足していること、またそこから、本研究テーマには希少性と研究可能性があること、さらには国際的な学界からみて、今後重要なテーマとなりうる可能性があることを提言。次回以降、ユネスコ世界の記憶に登録されている『東寺百合文書』にまつわる会計史研究を取り上げることを紹介。(p. 15)
連載第5回 会計史という世界を歩く―東寺百合文書の会計史―光明講方算用状から分かること①― ―	単著	2021年9月	きしわだ所報、岸和田商工会議所		○	ユネスコ「世界の記憶」に登録されている東寺百合文書、東寺百合文書WEB、ならびに東寺百合文書の中にある、15世紀末の光明講方算用状および関連文書を紹介。光明講方算用状の作成の目的を、当該組織の経営的役割（追善供養の実施と余剰資金と運用）から解明。さらに、光明講方算用状の構成（「収入」、「支出」、「貸付」の三部構成）について、会計学的解釈を概説した。(p. 15)
連載第6回 会計史という世界を歩く―東寺百合文書の会計史―光明講方算用状から分かること②― ―	単著	2021年10月	きしわだ所報、岸和田商工会議所		○	東寺百合文書の中にある、15世紀末の光明講方算用状および関連文書の機能を考究。光明講方算用状が残る100年間にあって、彼らの収支状況というのは一定ではないことを明示した。①東寺外部の人から光明講方への収入が滞ったことを契機に、光明講方は「誰からの出銭が未納になっているのか」を明確に把握すべく、現金の入りに特化した日記帳を作成したと考えられること②東寺光明講方が抱いた債権の回収可能性への危機が、債権の認識や記録の手法に変化を及ぼすという、会計思考のメカニズムを解明。(p. 15)